

Association between retinopathy and risk of dementia in a general Japanese population: the Hisayama Study

中村, 駿

<https://hdl.handle.net/2324/7329436>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution 4.0 International



氏 名： 中村 駿

論文名： Association between retinopathy and risk of dementia in a general Japanese population: the Hisayama Study

(日本人地域高齢住民における網膜症と認知症発症との関連：久山町研究)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

網膜症の病態の一つである網膜微小血管異常は、認知症の神経変性過程を反映することが示唆されている。一方、網膜症と認知症発症リスクとの関連を検討した地域住民を対象とした縦断研究は少なく、一貫した見解が得られていない。そこで、日本人地域高齢住民において網膜症と認知症発症との関連を検討した。

対象は2007年の久山町健診を受診した60歳以上の男女のうち、眼底写真が得られた1,709名であり、2017年まで追跡した。網膜症は眼底写真からModified Airlie House Classificationに従って判定し、網膜所見別では網膜毛細血管瘤および網膜出血に区分した。認知症はDSM-ⅢRの基準で診断した。認知症の発症リスクの算出には、コックス比例ハザードモデルを用いた。年齢、性、学歴、高血圧、糖尿病、総コレステロール、body mass index、脳卒中既往歴、喫煙、飲酒、運動習慣を共変量として用いた。

結果、追跡期間中に374名が認知症を発症した。網膜症を有する群における認知症の粗発症率は、有しない群に比べ有意に高かった($p=0.01$)。非網膜症群に対する網膜症群の認知症発症のハザード比(多変量調整後)は、1.64 (95%信頼区間 1.19-2.25, $p<0.01$)であった。網膜所見別の検討では、網膜毛細血管瘤を有する者では、有しない者比べ認知症発症リスクが有意に上昇した(ハザード比 1.94, 95%信頼区間 1.37-2.74, $p<0.01$)。

結論として、わが国の地域高齢住民において、網膜症を有するものは認知症発症リスクが上昇した。